



ボクっ娘足コキピュッピュ



「お前、ボクみたいなの  
オトコ女に興奮する

ヤツはいないとか、ゴリラの  
メスのがマシとかさんざん  
言ってたよな？」

「は、はい……」

「そんなヤツがなんで私の  
部屋でち○ぽ出して下着  
あさってたの？」

「な、なんでだろ……」

「おかしいなあこんなゴリラに」

「この状況でまだ言い逃れ？」

「お前がいつもボクの胸や  
お尻ガン見したの気付いて  
ないとも思ってたんの？」

「そんなべっちゃパイ見ても  
萎えるだけだしっ！」

「ほほう？」

グ  
ッ

グ  
ッ



「じゃあ、見せてやるから早く萎えさせてくれよ、このカチカチち○ほ」

「あぁっ！おっぱは……」

「おいおい、ますます硬くなってくるぞ？ドクドク脈打って足が熱いくらいだどうしたんだ？」

「はぁっ……はぁっくそっこんなっ……くっ」

「ふふん……なあ、お前ボクのこと好きなんだろ？正直に言えよ」

「ち、……違っ！」

「強情だなあ、正直に言えば特別にヌいでやるよ」

「……………」



「俺！お前のこと好きでっつ、でも照れ隠しで酷いこと言ってる！そのっゴメンっ！」  
「知ってた。てか他のヤツらもみんな知ってる」  
「ええ!」  
「バレバレなんだよ。ほれ、正直に言えた褒美にパンツも見せてやるよ」  
「ああっ!」  
「おい、ち○ぽがビクビクしてきたぞ?」  
「あっ、そんなにシゴいたらっああっはあっ:ううっ」  
「もう、出したいの?」  
「はああっ出したいっ!お前の足で射精したいよお!!」

はっ

はあっ...

グイググッ  
シタッ  
シタッ  
シタッ



「ほら、ボクのおま○こ  
見ながらいっちゃいな!」  
「おおっ! おま○こ  
お前のおま○こ想像して  
何度オナツたか! 本物  
ま○こ! あっもうっ! 出る  
出るっあっあっ! 無理っ  
あああっ!」  
「あっはっは! すぎえ  
噴水みたいだ、白くて  
粘っこくて全然キレイじゃ  
ないけど」  
「はう...くっふううっ」







